

〔論文〕

## 「ないものはない」の二義性について

宝島 格・今仁生美

名古屋学院大学商学部/外国語学部

### 要 旨

本論文では、発話に対して、自然な聞き手が内容を理解するのと同様の動作を計算機にさせるという方針のもとで、「ないものはない」という発話を「理解」させるにはどのような要素が関係しているかを考察した。とりわけこの発話の二義性を説明するためには、聞き手の「理解」の動作（情報の処理）が状況によって異なることが必要であり、そのためにはどのような要素を「理解」の動作に持ち込む必要があるかを明らかにした。これによりこの発話の二義性が説明されるとともに、「理解」の動作が状況によってどのように左右されるか、その一部が明らかにされたことになる。

キーワード：自然言語理解，計算機，認知，二義性，オブジェクト

## On the ambiguity of “nai-mono-wa-nai” in Japanese

Itaru TAKARAJIMA, Ikumi IMANI

Faculty of Commerce/Faculty of Foreign Studies  
Nagoya Gakuin University

## はじめに

自然言語が使われる場面において、文の意味がどのように捉えられているかを考えるのに、二義性(両義性)のある文は時に興味深い状況を提示してくれる。本論文で問題にしたいのは日本語の文

ないものはない。

における二義性であるが、これが話し手と受け手のこの状況に対する「姿勢」に究極的には起因するものであることを見ていきたい。

文の「意味」をどのように扱うかについては様々な研究がなされているが、筆者らの一連の論考(宝島・今仁(2002, 2003, 2007a, 2007b, 2009, 2012, 2013a, 2013b, 2016, 2017))においては一貫して「計算機に自然言語を『理解』させ扱わせる」という観点から、発話に対して聞き手である計算機がどのような反応をすべきかを考察してきた。これは即ち、発話に対して聞き手である人間がどのような動作(情報の処理)を行っているかをたどり、計算機に同様の動作を行わせることが、計算機がその発話を「理解」していると言えるのではないかとということである。

この観点からは、発話(された文)  $p$  の「意味」をどのように捉えるかということ自体に特別な重要性はないが、宝島・今仁(2002, 2003)に述べたように、強いて言えば聞き手の知識が  $p$  の前後でどのように変化するかを  $p$  の「意味」とすることもできる。聞き手の知識を計算機においてどのように表現し実現するかについては様々な方法があろうが、ともかくもありうる知識全体の集合を  $T$  とすれば、 $p$  の「意味」は  $T$  から  $T$  への写像の一つと見なせる。

$p \in \text{End}(T)$  ( $\text{End}(* )$  は  $*$  からそれ自身への写像全体の集まりを表す。)

この捉え方は即ち、聞き手の知識の変化によって、 $p$  が聞き手にどのような影響を与えるかを計ろうとする捉え方である。 $p$  の聞き手への影響を更に、聞き手のその後の行動に与える影響と捉えることもできる。但し、知識の表現方法にもよろうが、聞き手が自らの知識に基づいて行動すると考えるならば、知識への影響にはその後の行動への影響も既に含まれているとも考えられ、大きな違いがあるわけではない。

とは言え聞き手への発話  $p$  の影響を、聞き手のその後の行動への影響も含めて考えることで、「ないものはない」という発話の「意味」を、より明瞭に捉えることができる。以下では知識の計算機上の表現方法や、それを行動にどのように利用するかについて明確な定式化を行ってはいないが、この発話をも扱うためには定式化においてどのような要素を考慮すべきかを考えていきたい。とりわけ発話に対する聞き手の反応動作(情報処理の動作)がどのように行われるべきかを考えることで、これを見ていくことにする。

## 1. 二つの解釈

### 1.1 「開き直り解釈」と「全能解釈」

本論文で問題にしたい発話

(1) ないものはない。

には、明確に区別できる以下の二つの解釈がありうる。それぞれを明瞭化するためには、それが発せられた状況を併せて考えるのが効果的である。

(1.1) 状況：子供が父親に、クリスマスプレゼントとして、ある特殊なキャラクター商品をねだっているが、どの店でも既に売り切れで、見当たらない。にも拘らず子供はそれを買って買ってとしつこくねだる。それに苛立つ父親の返答。

父：ないものはないんだ！ 仕方ないじゃないか！

これは当該の対象（モノ）が存在しないことを再確認する、あるいは、「存在しないものは存在しない」というトートロジー（恒真式、従って絶対に覆せない）を理由とすることによって、議論の余地なく認めさせようとする、いわば開き直りの発言である。これを「開き直り解釈」と呼びたい。

一方、次の状況では異なる解釈となる。

(1.2) 状況：近く開催されるふるさと物産展において、そのご当地の特産品を網羅的に展示販売していることをアピールしようとして、ポスターを作成した。大変多くの品物が揃っており、来場者は満足するであろうと考えている。

主催者：ないものはありません！ ぜひご来場を。

これは言い換えれば「全てのものが存在する」ということである。よってこれを「全能解釈」と呼びたい。

### 1.2 述語論理などによる意味の表現

これら二つの解釈は、意味が明瞭に区別されたものとして通常は認識される。しかし、「意味」を表現するものとしてごく原初的に用いられる述語論理の論理式によってこの文を表現すると、二つの解釈は甚だ不明瞭なものとなる。

まずそもそもの問題として、述語論理においては「存在する（しない）」という性質が特別の地位を与えられていることがある。初歩的な述語論理においては、どのような言明も最終的には量子子を用いて、何らかの性質を持つものが存在するか否か、あるいは存在するもの全てに適用

できるか否か、という形に言い換えられることになる。従って、ごく単純に

(1.3) 以下のような $x$ は存在しない： $[x$ ：性質「存在しない」]

ということを表そうとして次のような形

(1.4)  $\neg \exists x [ \neg \exists x ]$

にしてしまうと、述語論理の論理式として不適格なものになってしまう。少なくとも後者の $x$ については、通常の述語としての「存在する」という性質を表現する、述語「exist」などを用意して

(1.5)  $\neg \exists x [ \neg \text{exist}(x) ]$

のような形にする必要がある。ここで述語existは通常の述語という扱いになっているのだが、この言明から引き出せる意味内容を正しく捉えるためには、実は量化子と同じ意味を持っているのだということを何らかの形で反映させる必要がある。

あるいは、別の論理式の作り方としては、全称量化と述語existを用いて

(1.6)  $\forall x [ \neg \text{exist}(x) \rightarrow \neg \text{exist}(x) ]$

のようにすることもできる。もちろんこの場合もexistの実際の役割が量化子に代わるものであることを何らかの形で反映させる必要がある。

その上、ここでの大きな問題は、どのように表現しようとも、「開き直り解釈」と「全能解釈」の違いが表現できないことである。結局は当たり前の言明（必ず真であるトートロジー）を述べているということになるだけである。

述語論理において「意味」は、「世界の状況がどのようなであればその文が真となるか」という形、即ち「その文が真となるような世界の状況の集合」として捉えられる。従って、必ず成り立つトートロジーは、何らの情報も与えてくれない無意味な文ということになり、この面で原初的な述語論理を(1)の理解に用いるのは不十分である。

述語論理のように「静的」な「意味」の捉え方をするものへの批判・反省から、発話・談話をより動的に、発話の順序に従って解析していこうとする理論が考え出されてきている。その一つに、談話表示理論(DRT)がある(Kamp & Reyle (1993))。これは談話の進行に伴って変項や述語などを生成し、その談話の「意味」は、得られた結果に対する翻訳(解釈)を行うことで与

えようとするものである。人間が談話を聞いてどのように反応するかということを反映させようとする点で、筆者らの考える「計算機による理解」も大きな意味ではこの枠組みに入るものであるが、かなり精緻化されてきたDRTの理論においても（精緻化されているからこそ）やはり「存在」や「量」の取り扱いには独特の地位を与えられており、(1)のような発話をDRTで直接的に扱うのは述語論理と同様の難しさがある。

以上のように、発話に対して「その発話がどのような状況を真とするか」ということに重きをおいた「意味」理論では、二つの解釈の違いを明確化することは難しいように思われる。それは、トートロジーに情報が無いからであり、二つの解釈を弁別するには、聞き手の（そしてそれを意図する話し手の）より曖昧な反応の違いを考慮に入れねばならない。

但し、次に見るように必ずしも(1)をトートロジーとして捉えねばならない場合ばかりではないのは確かであり、そのような場合においては二つの解釈の違いは一定の明瞭化が得られる。

### 1.3 述語「存在」の意味の限定による解釈

先の「開き直り解釈」(1.1)と「全能解釈」(1.2)では、「ない（存在しない）」についてより限定的な理解をすることが可能である。次の(2.1)は(1.1)に、(2.2)は(1.2)に対応する。

- (2.1) この店にないものは、他の店やメーカーにはあるかもしれないが、この店にはない。  
(2.2) この物産展にないものは、どこにもない。

このように、「どこに存在するか」を明確にして、述語「ない（存在しない）」を捉えれば、この例における二つの解釈の違いはこの上なく明瞭に理解できる。

述語論理の論理式で表現するならば、「ここに存在」を述語  $existhere$  とするならば、例えばそれぞれ

- (2.1.1)  $\neg \exists x [ \neg existhere(x) \wedge existhere(x) ]$   
(ここにないもので、しかもここにあるものは、存在しない = トートロジー)  
(2.2.1)  $\neg \exists x [ \neg existhere(x) ]$   
(ここにないものは存在しない =  $\forall x [ existhere(x) ]$ )

などと表現することになるが、述語論理であってもこの場合は両者に明瞭な違いが得られる。

これらのような限定解釈においては、「存在する」場が、「この店」「この物産展」のような「この場」と、「それ以外の場」とに分かれており、その結果、解釈の違いが明確化されている。しかしながら、「存在」の意味をこのように二つの場を用いてそれぞれ限定して解釈するのではなく、これらの二つの場が全く同一の、「考えられうるこの世・この世界」であっても、二つの解釈は

区別されうると感じられるのではないか。以下のような一連の状況・発話を考えてみよう。

- (3.1) 空想は所詮空想である。ありえないものを欲しがっても、手には入らない。
  - (3.2) 想像すらできないものは、(この世では) 見つけることは期待できない。
  - (3.3) 三角形の四つ目の辺など考えても無駄である。存在自体が矛盾を孕んでいるようなものは、(この世には) そもそも存在しえない。
  - (3.4) (この世に) 存在しないものは、(この世には) 存在しない。
- 
- (4.1) 人間はただ居るだけで価値があるのだ。全く無価値な人間は、(この世には) 存在しない。
  - (4.2) 言葉は世界の基盤である。言葉で表現できないものなど、(この世には) 存在しない。
  - (4.3) 思惟は万能である。思い浮かべることすらできないものなど、(この世には) 存在しない。
  - (4.4) (この世に) 存在しないものは、(この世には) 存在しない。

上記 (3.1)~(3.4) のような話の流れで聞くと、(3.4) は開き直り解釈、(4.1)~(4.4) のような話の流れで聞くと、(4.4) (= (3.4)) は全能解釈と感じられやすいのではないだろうか。どちらも多少の揺れを伴うかもしれないが、少なくとも二つの解釈は、はっきりと区別されたものとして認識できるものと思われる。

即ち、二回出てくる「存在」の意味を「どの場に存在するか」によって限定的に解釈するのはない場合においても、やはり二通りの解釈は可能であるように見える。この二つの解釈を、計算機の「理解」の動作として実現するにはどのような要素を考慮することが必要になるかを、以下では考えたい。これは人間がこの発話を理解する際にどのような情報処理の動作を行っているかを考察するものである。

## 2. 発話理解の動作と聞き手の「姿勢」

以下では、我々人間が何らかの文脈で何らかの発話を聞く際に、どのような情報処理の操作を行っているか、より具体的には、どのようなイメージ操作を行い、付随的にどのような留意点を記録しているかを、専ら内省に基づいて考察し、二つの解釈がどのように得られるかを見ていきたい。

### 2.1 オブジェクトの生成と性質づけ

発話に接するとき、聞き手は頭の中でどのようなイメージを持ってその発話を理解しようとしているのか。ごく単純な図式を用いるだけでは皮相的な理解しか得られず、人間の理解の動作を総体的に説明することはできないであろう。例えば、発話内容が図形的な事柄に関わる場合には、イメージの処理は図形を扱うための仕組みを援用しながらの、複雑なものになるであろうことは、宝島・今仁 (2009, 2012, 2013a, 2013b, 2016) などのいくつかの研究においてもこれまで考察

してきた通りである。

しかし、モノ（対象）の存在や個数、名目的な性質といった事柄については、大きな枠組みが存在するものと思われる。原初的な方式としては述語論理のような方法であろうし、精緻化された方法にはDRTのようなものがある。筆者らの取る立場も、大きく言えばDRTのような枠組みの一種と言えよう。以下ではそれを具体例に即して見てみたい。

次の発話を聞くときの聞き手の意識を考えてみたい。

- (5.1) 太郎は若い。
- (5.2) 大きな猫が寝ている。
- (5.3) (その店では) タマネギは高い。

聞き手が(5.1)を聞くとき、その発話を聞き手の中で処理するための暫定的な処理領域（これを宝島・今仁（2002, 2003, 2016）では「情景」と呼んだ）が確保され、その中にまずは「太郎」を表すオブジェクト（イメージ操作を受ける対象）が生成（導入）される。具体的な太郎その人を知っている場合には、ある程度まで精密化されたイメージであろうが、以降において特に必要がないならば、単に他のオブジェクトと区別するだけの「点」でも構わないであろう（こうした精緻化とその逆の汎化については、宝島・今仁（2016）において考察している）。重要なのは、聞き手の知識のシステムの中で既に存在しているオブジェクト「太郎」（現実世界の「太郎」に関する情報を蓄積しておくために以前に生成されていた）に、情景内のオブジェクトが関連付けられ、新たな情報が得られれば既存の「太郎」オブジェクトに性質・情報が追加できるということである。

聞き手の知識をどのような形でストックし、新たな情報に対してどのように変形・操作するかについての詳細な定式化はまだ完成していないが、外界に存在するモノを知識内で表すオブジェクトや、あるいは思惟の中でのみ扱われるモノをも表すオブジェクト、そしてそれらの属性・性質、関係、またそれらの集合や何らかの範囲を扱うための領域（ドメイン）を、備えている必要がある。我々人間がものを考える際には、こうした道具立てを利用して、物事を理解し推論しているものと思われる。

我々は、発話の流れに応じて暫定的に生成した情景内に、オブジェクトを生成したり、それら进行操作したり、それらに性質・関係を付加したり、という動作を行いながら、既存知識との間で既に知っているオブジェクト等（「太郎」など）に関する情報のやりとりを行い、発話が完了した際には、得られた情報（の必要な部分）を知識につけ加える、という動作を行っているものと思われる。

(5.1)の場合、「太郎」オブジェクトに、「若い」という性質がタグ付け（関連付け）されて情景の構成は終了する。

こうして構成された情景は、我々人間の聞き手がどのようなイメージ操作をしているかを表し

ており、(5.1) の場合は以下のような情景ができあがることになる。なお、「場」としたのはオブジェクトが導入される「場面」である。(5.1) の場合は「太郎」オブジェクトの属性に関わる一般的なものであるから、特別の場面としては考えられないであろうが、注意深い聞き手であれば、発話の時点（太郎も年を取るの）、話し手の年齢（「若い」という語の用いられ方）、話し手の悪辣さ（何か特別な意図があるかもしれない）等々を「場」として記録しておくこともありうる。またOはオブジェクトである。

(5.1.1) 情景

場：発話の想定している場（この場合は特別の定めなし）

O（太郎）：若い

この情景が構成されること、あるいはそれが（そのまま）知識にストックされることによって、聞き手にどのような影響が生じるのか。「太郎」オブジェクトが既に知識にある聞き手なら、知識内の既存の「太郎」と情景の「太郎」を同一オブジェクトとして関連付け、情景の「若い」という属性を既存の「太郎」にタグ付けすることになる。「太郎」を知識に持たない聞き手であれば、新たにこのオブジェクトを知識につけ加えることになり、その結果、「太郎」なる人物が存在するということが暗に含意されることになる。即ち、聞き手が後の行動において、この情景を利用しようとする際には、人物、あるいは「太郎」という名の人物が、「存在するか否か」を、この情景を走査することによって判断することができる。そのようにして、この情景はその後の聞き手の知識に反映され、その後の聞き手の行動に影響を与えることになる。

この「存在」や「個数・人数」に特に注目して(5.1)の「意味」を捉えようとしたのが述語論理であるとも言えよう。

DRT（談話表示理論）でも、動作は同様に進む。発話に対して「情景」と呼んだものは一つの囲み（箱、場、フィールド）として用意され、「オブジェクト」にあたる変項がその中に配置され、その変項の満たす性質が、その性質を表す述語と変項によって囲みの中に記入される。DRTにおいて「意味の解釈」は、こうして得られた囲みの中の変項と述語によって、人物の存在等々を走査して得られる。これらの動作においては、筆者らの考える、情景の操作との違いはない。但し、こうした情景のオブジェクト（DRTでは変項）を、既存の知識等と関連付け、積極的に操作に活用すべきであるとするのが筆者らの主張である。（残念ながらこれには既存の知識システムの形態から定めて行く必要があるために、完全なものを提出するに至っていない。）

次の(5.2)においては、「大きな猫」は聞き手の知識の中に存在していなかった、未知のオブジェクトであることが(5.1)と異なる。しかし、情景の構成は同様である。猫のオブジェクトが生成され、性質「大きい」「(その時点でそこに)寝ている」がそのオブジェクトにタグ付けされる。既存の知識には新たなオブジェクトとしてこの「猫」が、その性質とともに追加されることになる。



(5.2.1) 情景

場：発話の想定している時点，場所

O (猫)：大きい&寝ている

情景に導入されたオブジェクトOに，猫，大きい，(その場では)寝ている，という属性・性質がタグ付けされる。上記では猫を特にオブジェクトの基本的属性と見なしたような扱いになっているが，ここでは特にこだわる理由はない。

この情景を後に走査することになれば，その時その場所では，猫が存在していたり，寝ている動物が存在していたり，動物の個体数が1以上であったり，ということが導き出せる。述語論理ではその部分を特に強調して

(5.2.2)  $\exists x$ [猫(x) & 大きい(x) & 寝ている(x)]

などと述べるわけである。

さて次の(5.3)では，若干動作が異なる。これは(助詞「は」の使用から判断されるように)「総称文」であり，「タマネギ」のオブジェクトは，特定の一つのタマネギを表すために用いられるものではなく，その場の全てのタマネギに共通して見られる状況を，代表的に表すために用いられている。従って情景において「タマネギ」オブジェクトが一つ生成されるにしても，そのオブジェクトとそれに関連付けられる性質等はその後，「タマネギのどれに対しても同様に適用される図式」(但しその店の中のタマネギに限る)として扱われることになる。

(5.3.1) 情景

場：その店 (のその時点)

総称O[タマネギ] → 高い

総称領域：その場の全ての商品 (野菜) の集まり

ここで**総称オブジェクト**は，**総称領域**にあるモノのうち，[ ]内の性質を満たす全てのモノを代表して表している。[ ]内の性質をこのオブジェクトの**資格要件**と呼び，→の右側を**追加性質**と呼ぶことにする。この情景は，総称領域の中で総称オブジェクトの資格要件と同一の図式が見られるモノについては，全てこの総称オブジェクトの追加性質がタグ付けされる，ということを表している。即ち，そのようなモノ (オブジェクト) が見つかるたびに，追加性質がタグ付けされるものとして処理がなされる。

なお，総称オブジェクトについては，文脈にもよるが，必ずしもそのオブジェクトで表されるモノが存在しているとは見なせない。後処理で走査する際に，総称オブジェクトが見られたからといって実際にそれに対応するモノが存在する扱いをしてはいけないということである。但し，

日常的な発話であれば、存在が含意されていると見なされることは多い。

また、総称文では例外があることも往々にして許容され、上記の扱いは実際上は厳格すぎる。現実の扱いでは例外の存在も考慮せねばならない。

そういうわけで、既に、あるいはその後の情報付加によって、聞き手の知識の中に（その店の）タマネギオブジェクトが（いくつか）存在しているならば、知識の操作においてそれらオブジェクトに突き当たるたびに（5.3.1）の情景が呼び起こされて、そのオブジェクトは高価であるというのを聞き手は知ることになり、聞き手の行動はその影響を受ける。

なおここでは日本語の助詞「は」と「が」の使い分けなどの問題（「タマネギは高い」と「タマネギが高い」の違い）には立ち入らない。文の構成要素の状況からいかにして情景構成等の動作を使い分けるかの詳細は、別に検討を要する問題である。

## 2.2 量と存在の述語、領域計算

情景とオブジェクトの操作において、通常の述語（や性質）の入るべき位置に、量や存在を表す述語（や性質）が来る場合が、本論文の問題とする発話である。このような場合、情景の操作はどのようになるのかを見ていきたい。

次のような発話

(5.4) (その店では) タマネギは三つある。

(5.5) (その店では) タマネギはたくさんある。

では、文の主述の構造は（5.3）と変わらないが、述語が「高い」ではなく「三つある」「たくさんある」となっており、これは「高い」と大きく異なる扱いを受ける。個々のタマネギの属性ではなく、数量表現であるため、(5.4) (5.5) は総称文ではなく、ものの数量を表す文と判断される。我々がこれらの文を聞くと、頭に思い浮かべるイメージを情景として構成するならば、(5.4) においてはタマネギを表すオブジェクトを三つ、情景の中に生成するであろう（ちょうど三つであり四つはないということも含意する場合がある）。

### (5.4.1) 情景

場：その店（のその時点）

$O_1$  (タマネギ)

$O_2$  (タマネギ)

$O_3$  (タマネギ)

なお三つのオブジェクト  $O_1$ ,  $O_2$ ,  $O_3$  は互いに相異なるものとして扱われる。即ち、後に走査することがあれば、タマネギは三つ以上確認できることになる。

(5.5) においては個数が不明瞭であるために、具体的な個数を伴ってオブジェクトを生成する

ことはないが、個別のタマネギオブジェクトの集積した集合を表すオブジェクトを生成することになる。そうした集合オブジェクトは、「精緻に見れば個別のタマネギオブジェクトから成っている」という扱いを受ける。そしてまた、助詞「は」の使用から判断されることであるが、タマネギであるようなオブジェクトについてはこの集合に入っているということも、了解する。即ち、この後（その店の）タマネギについて走査や操作を行うにあたっては、この集合のメンバーを取り上げることになるということである。これは（5.3）で見られたような、全称の代表的オブジェクトとしての扱いにも通ずるものである。

#### (5.5.1) 情景

場：その店（のその時点）

集合O：代表O[タマネギ] 量：たくさん

領域：その場の全ての商品（野菜）の集まり

集合オブジェクトは、多数のオブジェクトから成る集合を扱うためのオブジェクトであり、そのメンバーは代表オブジェクトの資格要件に合致するもの全てである。代表オブジェクトの資格要件は、[ ]内に表された図式であり、これに合致することが集合オブジェクトのメンバーである条件である。（5.5.1）の場合にはタマネギであることが要件である。そしてそもそものオブジェクトの範囲として前提されているのが領域に表されている。即ち、この領域内で[ ]の資格要件を満たすものを集めた集合がこの集合Oであり、そのメンバーの個数（量）は、たくさんである。

なお、集合オブジェクトのようなものがどのような扱いを受けるべきかについては、宝島・今仁（2007a）でやや詳しく検討した。

（5.4）に対する情景を、この集合方式で構成することもできる。個数がすぐにイメージできないような大きな数になる場合、我々の意識の中でも集合オブジェクトを用いて処理しているものと考えられる。

#### (5.4.2) 情景（集合オブジェクト使用）

場：その店（のその時点）

集合O：代表O[タマネギ] 量：3

領域：その場の全ての商品（野菜）の集まり

このように、我々が文の述語の意味内容（通常の述語なのか量の述語なのか、など）に応じて、構成するイメージ（情景）を使い分けしていることは、内省から明らかであると思われる。

同様のことが、「存在」に関する述語にも見られよう。

#### (5.6) タマネギはある。タマネギは（そこに）存在する。

この発話に対して、聞き手は情景の中にタマネギを表すオブジェクトを導入する。この場合は性質「存在」をタグ付けしなくてもそのまま存在が含意されることになるが、発話の内容を明瞭にするためにあえてタグ付けすることも可能である。

(5.6.1) 情景

場：その店（のその時点）

O（タマネギ）

(5.6.2) 情景（別パターン）

場：その店（のその時点）

O（タマネギ）：存在する

一方で、「存在しない」の場合、その扱いはやや便宜的に思われる。我々が発話を聞く際の意識の中で、このような情報がどのように扱われているかを内省すれば、次のような動作が考えられよう。発話

(5.7) タマネギはない。タマネギは（そこに）存在しない。

を聞くとき、一つの動作としては、タマネギオブジェクトを導入し、単にそれに「 $\neg$ 存在する」なる性質をタグ付けするというものが考えられる。この、情景にストックされたオブジェクトおよびタグ付け性質は、通常の述語「高くない」＝「 $\neg$ 高い」などの場合と同様、のちにそこから情報を引き出す（利用する）必要が出たときに、改めて処理を行うことになるが、この「 $\neg$ 存在」なる性質の場合は大変特殊で、オブジェクトがそこにストックされていてもそのオブジェクトの表すモノ（タマネギ）を「存在するもの」としてカウントすることはできない。これは「 $\neg$ 高い」とはかなり異なる扱いであり、そういう意味でかなり暫定的な扱いと言えよう。タマネギにタグ付けられた「 $\neg$ 存在」は、のちに（その店に）タマネギがあるかどうかを調べる必要が出たとき、「（その店で）探しても無駄」と答えるという利用のされ方をするようになる。

(5.7.1) 情景

場：その店（のその時点）

O（タマネギ）： $\neg$ 存在

一方で、このような暫定的な扱いではなく、更にモノの存在に立ち入った扱いもありうる。モノが存在するか否か、存在するならどのくらいの量が存在するかは、オブジェクトなどで構成されている我々の意識下の情景においてかなり特異な地位を占めるもので、情報のストックの仕方として、「ある範囲（領域）に、当該のモノがどれだけあるか（ないか）」を、独自の方式でストッ

クしているように思われる。つまり、(5.5.1)や(5.4.2)で見たように、集合オブジェクトを用いて、領域「その店」におけるそのモノの存在量をストックするという方式であり、DRTなどではこれは量子子の扱いに表れているものである。

(5.3)のような単純な発話の場合、「その店」という場に単にタマネギオブジェクトを導入（同時に性質「高い」をタグ付け）して情景の構成は終了する。後に領域「その店の全ての商品（野菜）の集まり」にタマネギが存在するか否か、存在するならばいくつ存在するかを考える必要に迫られた際には、その領域に対応する場である上記の情景を走査して、タマネギオブジェクトを探し、既に導入されているタマネギオブジェクトを見つけ、この領域にあるタマネギの量について「一つ以上」等の情報を得ることになる。この情報は、(5.5.1)の情景のように、集合オブジェクトとその量（当該領域内の）という形でストックされる。このように領域内のある集合の量を明確にする処理を「領域計算」と呼びたい。(5.7)の場合には発話を聞くと同時に領域計算を行って、存在量についての情報に変換してしまった内容を情景として構成する（知識にストックする）、ということを行っている可能性がある。単純なオブジェクト導入と「 $\neg$ 存在」のタグ付けにおいては後回しにしていた動作を、聞き手によっては、あるいは状況によっては、発話を聞くと同時に行ってしまい、単純なオブジェクト導入の操作を省略するということが十分に考えられるのである。

#### (5.7.2) 領域計算を表示する情景

場：その店（のその時点）

集合O：代表O[タマネギ] 量：0（即ち空集合）

領域：その場の全ての商品（野菜）の集まり

このような二種類の動作（一方は暫定的にのみ発話を聞き、他方はそれなりの計算を伴ってよりよく理解しながら聞く）のどちらが起るかは、聞き手や状況によって異なるものと思われる、それが本論文での二つの解釈に影響していることをこののち見ていきたい。

### 2.3 オブジェクトの暫定性とモノの存在

オブジェクトを導入する際には、発話の内容あるいは思考の内容をそのまま設定することが当然可能であるが、そうして導入されたオブジェクトが、真の意味で存在するものと言えるかどうかは全く別の問題である。それは発話の「理解」の程度にもより、まともな大人なら想像すらできないようなモノを、発話およびオブジェクト導入においては用いることは常に可能である。例えば発話

(6.1) 角のない三角形は、内角の和を持たない。

において、少なくともこの発話を理解しようと努めるならば、一応のオブジェクト導入は可能で

あり、

### (6.1.1) 情景

場：数学的対象の考察

総称O[三角形 &  $\neg$  (角を持つ)]  $\rightarrow$   $\neg$  (内角の和を持つ)

総称領域：数学的対象 (あるいは図形) 全ての集まり

という扱いを受ける。しかし、まともな大人なら、「角を持たない三角形」自体を想像することは困難であり、この「角無し三角形オブジェクト」を精緻化して思い描くことができない。「角無し三角形」という性質を、単にタグ付けされただけの、のちに処理すればよい性質として放置しておく場合にのみ、発話の理解が可能である。その理解は、真の理解とは言えない (と大人は感じるであろう)。

この (6.1) の場合は明瞭にそのオブジェクトの非存在が判明する例であるが、実際にはこうしたオブジェクトは常に用いられているのである。次の

### (6.2) 二つの素数の和に分解できない偶数は、 $\bigcirc\bigcirc$ なる性質を持つ。

において、主語のオブジェクト (が表すモノ) が真に存在するか否かは、すぐにはわからないし、こうしたモノが存在するかどうか自体が数学的研究では問題になることが多い。その場合、そうしたモノが持つはずの性質をもとに議論が進むのであって、オブジェクトの導入などの操作を否定されれば、議論自体が成り立たない。

つまり、ありえないオブジェクト (あるいはありえないかどうかわからないオブジェクト) も、自然言語の発話には常に用いられているのであり、しかもそうしたオブジェクト (の表すモノ) を「存在する」と言えるかどうかとも、文脈に大いに左右されるのである<sup>1)</sup>。(これについては宝島・今仁 (2007b) において考察した<sup>2)</sup>。)

- 1) 「存在する・しない」の語の意味そのものは状況によって変わるものと考えられる。例えば数学的対象 (真の円とか、虚数とか、そもそも数とか) を「存在する」と言ってよいのか。単に「考えることができるもの」は (そういう文脈では) 「存在する」と言ってもよいかもしれない。更にはかなり無理なものでも存在すると言えそうなこともある。「二つの素数の和に分解できない偶数」のようなものが、ある数学的証明の一部分の反例になっているとき、そうした偶数を考えることはその証明を不完全なものとしてしまう。そうした偶数が全く存在しないことが判明して初めて証明は完成するのであるが、それまでは、あくまで証明の不備を指摘するという文脈であるが、「その証明には反例が存在する」と言いうるようには筆者の一人は思う。
- 2) 「存在」ということの意味は言語哲学において古くから議論されているが、上記脚注1にも拘らず、ここでは筆者らとしては、何かが「存在」するか否かを問題にするつもりはない。言語の使い手が、どのような意図で発話し、どのようなプロセスでそれを理解しようとするかに興味があるのであり、「何かが存在すると言えるかどうか」には特段の興味はない。筆者らの(6.1.1)のようなプロセスの理解が可能なのは、「三

このように、発話をどのように、どこまで理解するかは、その都度異なるのであり、聞き手の態度、あるいは聞き手の態度をどのように想定するかについての話し手の意図によって変わる。次の有名な発話

(6.3) チェシャ猫はだんだん消えていき、最後に笑いだけが残った。

において、実体を失った「笑い」を、オブジェクトに対するタグ付けと暫定的に理解する以上の理解は困難であり、それがこの発話が言葉遊びとされる所以である。

## 2.4 存在の述語の扱い方：暫定的導入と領域計算

さて述語や性質が存在に関わるような発話の際に、聞き手の中でどのような動作が起こるか、情景の構成、領域計算がどうなるかについて、見てみたい。

まずは、一般的な構造として

(7.1) AでないものはBでない。

を考えてみたい。この構造を持つ発話を聞くとき、先に述べたように、聞き手の中では単純な情景の構成が行われ、状況によってはそこからの領域計算が行われる。

(7.1.1) 単純な情景構成

場：(略)

総称O[ $\neg A$ ]  $\rightarrow$   $\neg B$

総称領域：(発話の場にある全てのモノの集まり)

この情景は、その後用いられる場合には、当該領域内で性質「 $\neg A$ 」がタグ付けされたオブジェクトに出会うたびに、そのオブジェクトに性質「 $\neg B$ 」をタグ付けするという影響をもたらす。更に、そこからの領域計算は、次のような結果をもたらす。

---

角形」と「角」や「角が無い」とが、あるいは「偶数」と「二素数の和」とが、言葉の上では独立なものであることから、その「組み合わせ」をオブジェクト操作として行うことに特に問題が無いからである。(但し、三角形と角無しについては独立とは言えないと思うような聞き手が相当数いるであろうし、そうしたしっかりした大人の聞き手は(6.1.1)のような角無し三角形の扱いには厳しい拒否を示すであろう。そういう聞き手にとっては(6.1)は全く意味のない発話となる。)

このような、「独立」な性質の「組み合わせ」という観点は、特にマイノング(Meinong)の提唱する議論に見られる。これについてはStanfordの解説などを参照のこと。

(7.1.2) 領域計算を表示する情景

場：(略)

集合O：代表O[ $\neg$ A] :  $\neg$ B

領域：(発話の場にある全てのモノの集まり)

この領域計算では、集合オブジェクトに対してその量・個数を求めているわけではなく、そのメンバーが全て性質「 $\neg$ B」を持つという性質をタグ付けしている。この例においては(7.1.1)と本質的な違いはない。しかし更に計算すれば

(7.1.3) 更なる領域計算の結果の情景

場：(略)

集合O：代表O[B] : A

領域：(発話の場にある全てのモノの集まり)

が得られるであろう。この領域計算では、(7.1.2)の対偶に相当する結果を計算し、性質Bがタグ付けされた全てのオブジェクトが性質Aもタグ付けされているということを、集合オブジェクトを用いて述べている。

さて性質「 $\neg$ A」を持つモノ(オブジェクト)が想像しやすい場合には、単純な情景設定を行うことで話の続きをそのまま聞くということが可能である。話し手の側もそうしたモノ(を表すオブジェクト)を活用して、その後の発話を行うことがあろう。例えば八百屋での発話

(7.1.4) (この店で)タマネギでないものは高くない。

において、「 $\neg$ タマネギ」は具体的にニンジンであったり、ジャガイモであったりしようが、具体例が想像できることもあって、「 $\neg$ タマネギ」であるオブジェクトがどのようなものかは想像がしやすい(八百屋以外では難しいかもしれないが)。そのような例を伴う「 $\neg$ タマネギ」オブジェクトはそののちの発話でも利用されることになろう。この例の場合、「 $\neg$ 高い」も「安い」と言い換えられる性質で、更にまた理解しやすいと言える。

そして同時に、より発話を深く理解しようとしている注意深い聞き手においては、この単純な情景から引き出される総称文としての量的情報を、領域計算によって知識にストックすることになろう。即ち、当該の領域「その店の商品(あるいは野菜)の集まり」を、タマネギとそれ以外(のオブジェクト集合)に分類した際に、「それ以外」の側の全オブジェクトに「 $\neg$ 高い」という性質をタグ付けするという処理である。更に計算を進めた聞き手は、「高いものは全てタマネギ(の内に含まれる)」という結果まで行きつくであろう。後の聞き手の行動において、もしこの領域内の情報を活用する場面があったなら、これらの計算結果を活用することになろう。



(7.1.5) 対偶の領域計算の結果の情景

場：その店（のその時点）

集合O：代表O[高い] : タマネギ

領域：その場の全ての商品（野菜）の集まり

とは言え（7.1）のような場合には、対偶の領域計算まで進むのは注意深い聞き手である場合であろう。それが、存在の関わる次のような発話においてはやや様相を異にする。

(7.2) Aでないものは存在しない。

この発話に対して、総称文として情景に代表的な「 $\neg A$ 」オブジェクトを設定し、それに「 $\neg$ 存在」という性質をタグ付けすることは可能である。

(7.2.1) 単純な情景構成

場：(略)

総称O[ $\neg A$ ]  $\rightarrow$   $\neg$ 存在

総称領域：(発話の場にある全てのモノの集まり)

しかし、このようなオブジェクトと追加性質の導入は暫定的な処理であり、「笑いだけが残った」の類の形式的なものにすぎない。普通の聞き手はそのように処理しないものと思われる。即ち、普通の聞き手にとって（7.2）での処理は、対偶の領域計算まで行った

(7.2.2) 対偶の領域計算の結果の情景

場：(略)

集合O：代表O[資格要件なし] : A

領域：(発話の場にある全てのモノの集まり)

であり、これは問題となっている領域（「その店の中のモノ」の集まりなど）の全てのモノ（オブジェクト）に「A」をタグ付けするという処理である。

このような対偶の領域計算は、実際に「存在しない」を述語とする発話においてはかなり自動的であるように思われる。実際の例

(7.2.3) タマネギでないものは存在しない。

を理解するには、特段注意深い聞き手でなくとも、「その店の商品（野菜）は全てタマネギなのだなあ」と捉えるのが普通であろう。これは多少言い回しを変えた

(7.2.4) タマネギ以外は存在しない。

(7.2.5) タマネギしか存在しない。

においてより自動的に感じられる理解の仕方である（これらが「 $\neg A$ は存在しない」という構造を持っているかどうかには異論もあろうが）。「 $\neg$ 存在」という性質の想像のしづらさが、単純な情景の設定を超えて、対偶の領域計算（日常生活ではなじみ深い）に進んでしまう理由であると思われる。

同様な理由で、主部に「 $\neg$ 存在」のある場合は大変理解しづらい発話になる。

(7.3) 存在しないものはBでない。

において、形式的・暫定的なオブジェクト導入による情景構成を超えるものは通常は難しい。それは例えば、この言明と論理的に同等な対偶を瞬間的に述べようとしてみると感じられる。(7.1) 「AでないものはBでない。」の対偶は

(7.1.6) BなものはAである。

なので、(7.3) 「存在しないものはBでない。」の対偶を

(7.3.1) Bであるものは存在する。

とし、そこから「Bであるものが一つでも存在すればよい」ということが対偶であると感じてしまうかもしれない。しかしこれは正しくなく、正確に述べるならば

(7.3.2) Bであるものは「全て」存在する。

が正しい。(つまり、(7.3.1)の「Bであるものは」が総称的に解釈されねばならない。)とは言え、だからといってこれが一体「Bであるものが一つでも存在する」と本当のところ違うのか、確信を持って断定できるであろうか。(一つ明確に異なるのは、実は総称文(7.3.2)はBなるものが全く存在しなくても真であることである。読者は気づいただろうか。)なお、(7.3.1)のような曲がりなりにも対偶を思い浮かべればましな方で、「存在しないもの」と「存在するもの」の二分法を安易に活用して

(7.3.3) 存在するものはBである。

を(7.3)と同値な言明であると思ってしまう人も多い。

このように、この発話を理解しようとする際には、形式的・暫定的に情景構成をすることは可能であっても、「存在しないもの」というオブジェクトを想像することが難しいという、そのすわりの悪さから、対偶の領域計算に進もうとするのだが、その計算が(対偶の考えづらさから)即座には困難であるため、結局この発話(7.3)に対しては、「何を言っているのか分からない」という反応が生じる。具体的な発話

(7.3.4) (この店に) 存在しないものは高くない。

の聞き手には、その店に存在しないものが(具体例などでも)容易に想像されるのでない限りは、意味不明と感じられてしまう。

逆に、そうしたモノが具体的に想像できるならば、このタイプの発話も理解可能である。例えば

(7.3.5) この店に存在しないものは三つある。一つは笑顔、一つはやる気、そしてもう一つは規律である。

を聞くとき、話し手には具体的なイメージとして三つのオブジェクト(笑顔とやる気と規律)が存在しており、聞き手もそうした「はっきりとオブジェクトが存在している」ことを嗅ぎ取って、情景に三つのオブジェクトを導入することができる。この状況は、言葉を換えれば、問題のオブジェクトは初めから明確化されており、「(その店に) 存在しない」という性質はそのオブジェクトの一つの性質に過ぎないということである。(7.3.3)のように、「(その店に)  $\neg$ 存在」という性質によって集められたモノの集まりを、問題のオブジェクトが総称的に代表している場合には、オブジェクトの存在自体がこの「想像しづらい性質」によって規定されているが、(7.3.5)の場合には、オブジェクトの存在にとって性質「 $\neg$ 存在」は問題ではなく、そこでは「 $\neg$ 存在」は付随的な役割を担っているに過ぎない。聞き手にとって、オブジェクトを明確に導入できるかどうかの感覚が、両者では異なるのである。

(7.3.6) 情景

場：その店

$O_1$  (一つ目& $\neg$ 存在)： 笑顔

$O_2$  (二つ目& $\neg$ 存在)： やる気

$O_3$  (三つ目& $\neg$ 存在)： 規律

領域：その店にある全てのモノ(概念も含む)の集まり

オブジェクトの導入の仕方はなお詳細に定められようが、本質的にはこのような形である。

なお、領域が「その店」ではなく更に一般的な「この世」のような（但し心靈的な「この世」と「あの世」の区別などではなく、そもそも概念として存在するかどうか、思惟することができるかという「この世」であると理解したい）

(7.3.7) この世に存在しないものは存在する。思い浮かべることができないものは（ものも）存在する。

のような発話でも、同様の理解であれば可能である。一見すると矛盾するような発話であることもあり、ここには話し手の決意のようなものが感じられ、具体的に話し手がオブジェクトを持っているという印象が聞き手に伝わる。それによって、聞き手は「話し手の指示するオブジェクト」を情景に導入し、その一性質として「この世に存在しないもの」「思い浮かべることができないもの」がタグ付けされる。そしてそれは（この世あるいは思考空間に）存在するという性質を持つので、オブジェクトが存在することを以てその後の領域計算での使用が可能で、通常のオブジェクトであることが保証される（「 $\neg$ 存在」という形式的性質を付与されているオブジェクトであったならば、領域計算では存在するものとしてカウントできないという特殊な扱いを受けるのであったが、今の場合はそうではなく、通常のオブジェクトとしてカウント可能であるという扱いを受ける）。更に聞き手は、そのオブジェクトは具体的には何なのかが大変気になることになる（その一性質は「この世に存在しないもの」ということであるのだが）。

最後に主部述部ともに「 $\neg$ 存在」となった

(7.4) 存在しないものは存在しない。

即ち「ないものはない」のパターンであるが、これについては次々節において最終的な考察を行いたい。

## 2.5 情報の不正確さと発話の行為

これまでは発話について、事実に基づいた真なる言明であるものとし、聞き手が積極的に取り入れるべき情報であるとの前提で議論を進めてきたが、現実の話し手・聞き手の動作は、必ずしもそのような前提では進まない。これまでの議論でも例えば総称文

(5.3) (その店では) タマネギは高い。

は、一般的な会話においては必ずしも例外を許さないものではない。この発話から得られる情報として、人間世界特有の不正確さを持ったものと捉えられるのが普通である。

しかも実際には、聞き手が話し手のことを完全に信頼しているとは言えず、更には発話という

行為それ自体（その発話を行ったという事実）からも聞き手は何らかの情報を引き出すことになるし、話し手は逆にそれを意識して、聞き手の情報の引き出し方を推測しながら、意図した影響を達成すべく発話を調節するであろう。

こうした考察を詳細に行うことは本論文の目的を超えるもので、ここで立ち入った考察は行わない。しかしこのことから、たとえトートロジーであろうとも、それをわざわざ文として発話するということから、ある意図が汲み取られ、その後の聞き手の行動に影響を与える（与えようと話し手が意図している）ということになる。

「ないものはない」の開き直り解釈について言えば、話し手があえてトートロジーを発話し、その内容を聞き手に思い出させよう、再確認・念押ししようとしていることになる。ここから、聞き手は話し手の断固たる意志を読み取ることになり、その後の行動に「再度要求しても無駄である・諦める」という影響を与えることになることを指摘しておきたい。

## 2.6 聞き手の姿勢と二つの解釈

さていよいよ本論文の問題とする「ないものはない」において、これまで述べてきた「発話理解の流れ」がどのように二つの解釈に影響するのかを見ていきたい。

発話を理解するには情景にオブジェクトを導入し、オブジェクトを操作しながら発話を順次「理解」していき、必要に応じて量や存在に関する領域計算を行う、というのが通常の聞き手の動作であると考えられるが、前々節で見たように、「 $\neg$ 存在」という性質が関係する場合には、オブジェクトが想像しづらいことから、すぐに領域計算に進んでしまうことも十分に考えられる。「 $\neg A$ なものは $\neg B$ 」の形の発話において、 $B$ が「存在する」である場合、即ち「 $\neg A$ なものは存在しない」である場合には、対偶の領域計算によって、「(当該領域においては) 全てのモノが $A$ 」という結果が得られることになる。そしてまた、 $A$ が「存在する」である場合、即ち「存在しないものは $\neg B$ 」という発話の場合には、主語「存在しないもの」をオブジェクトとして容易に想像できるかどうか、通常のようなオブジェクト操作を行うか、それとも領域計算に移ってしまうかに影響すると考えられる。

従って、本論文で問題にする発話「存在しないものは存在しない」においては、主語を表すオブジェクトが想像しやすいか否かによって、その「理解」の動作に違いが生じ、これが二つの解釈に分かれる理由であると考えられる。オブジェクトが想像しづらい状況においては、すぐに対偶の領域計算に進んでしまう結果、「(当該領域においては) 全てのモノが存在する」という解釈が得られることになる。

オブジェクトが想像しやすいかしづらいかは、発話の状況における聞き手の姿勢によって変わってくるであろうし、話し手の側はその聞き手の姿勢を想定して発話するということになる。しかし一般的には、何らかの特別な文脈でない限りは、「存在しないもの」というオブジェクトは想像しづらいことが多いであろう。

さて問題の発話

(8) 存在<sub>A</sub>しないものは存在<sub>B</sub>しない。

において、主語の性質「存在」を「存在<sub>A</sub>」、述語の方を「存在<sub>B</sub>」と書いて区別することにする。状況によってはAとBは対象となる領域（どういう範囲で存在の成否を問題にしているか）も異なる。

**対偶の領域計算になる場合：全能解釈** 特定の文脈が存在しない場合などには、一般的には「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>」なるオブジェクトを想像することは難しく、聞き手は領域計算によって（無理のある）オブジェクト操作を回避するという動作に出るであろう。その場合、上述したように「存在<sub>B</sub>する全てのモノが存在<sub>A</sub>する」という量的情報としてこの発話を聞くことになる。ここで「存在」に関わる領域は、AとBそれぞれにおいて文脈から推測されるものであり、それを明記するならば、発話(8)は「領域Bの全てのモノは領域Aに存在する（含まれる）」という内容となる。例えば、本論文冒頭の発話(1.2)のような物産展での発話であれば、Aの当該領域は「その物産展の商品全体」であり、Bの当該領域は「考えられる全てのモノの集まり」（ここで「考えられる」の部分はどう捉えるかはまた文脈によって聞き手が推測するものであり、更に話し手は聞き手の推測を先回りして推測し発話することになる）であって、「皆さんが欲しいと思うような商品は全部この物産展にありますよ」という解釈になろうし、(4.3)(4.4)のような状況であればAもBも「ともかく想像・思考できる全ての対象」という最も広い範囲ということになり、「この世に（思考の中に）存在するモノは全て（この世に）存在する」といった解釈になろう。即ち、この場合には全能解釈が採られることになる。

このように、全能解釈では聞き手の情報処理の動作としては

(8.1) 対偶の領域計算の結果の情景

場：思惟（文脈によっては限定される）

集合O：代表O[領域Bに存在]：（Aに）存在

領域：発話の場にある全てのモノの集まり

という知識のストックをすることになろう。

また、この動作においては、「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>」なるオブジェクトの想像のしづらさは、特定のオブジェクトが既に存在してそれが「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>」という性質を（たまたま）持っていたということではなく、そもそも「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>」であることをオブジェクトの成立要件とするような、「一般的な」「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>オブジェクト」なるものを想像せねばならないことに起因しているとも思われる。

**オブジェクト導入になる場合：開き直り解釈と中間的な解釈** 然らば、例えば特定のオブジェク

トを既に想像しており、それが（たまたま）「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>」なる性質を持っていたというような場合に見られるように、「存在<sub>A</sub>しないモノ」がオブジェクトとして容易に想像できる場合には、どのような動作が起こると考えられるか。冒頭の(1.1)のように、特定のキャラクター商品が問題になっている場合、それに例示されるオブジェクトということで、主語を表すオブジェクトが聞き手の情景の中に導入されやすい。主語オブジェクトには「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>」なる性質がタグ付けされ、それは全称的に用いることが記録される。そしてそのオブジェクトが代表する全てのモノを持つことになる性質として、述部の「 $\neg$ 存在<sub>B</sub>」がタグ付けされる。結論として、「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>なるオブジェクトに出会った場合、それは常に $\neg$ 存在<sub>B</sub>なる性質を持っている」という情報がストックされる。

ここで更に、(1.1)のような場合には、AとBが同一である。その結果、「(特定のキャラクター商品に例示される)Aにないモノに出会ったら、それはAをいくら探しても見つからないと思え」という解釈が得られる。これはトートロジーであるが、前節で注意したように、聞き手は話し手の発話内容を完全に正しいものとして受け入れるわけではなく、多少の不正確さや詳細の欠如したものである可能性を考慮するので、再度「Aにはない」と繰り返すことで、聞き手が再確認し念押しされるという効果を持つのである。即ち、聞き手のその後の行動はこの発話によって「諦め」へと誘導される（誘導されやすい）ということになる。

こうして、主語の「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>」オブジェクトを（聞き手の姿勢に起因して、オブジェクトの例示があるなどの事情によって）想像しやすく、しかもAとBが同一である場合には、開き直り解釈が得られる。(1.1)で言えば、「お前の考えているモノ、それはこの店Aにないモノであって、それはこの店A(=B)でいくら探しても見つからない。だから諦めよ」ということになる。(更にこれは、「今後同様にこの店にないものをいくら要求しても無理だから諦めよ」ということも意味している。というのは、これが総称文だからである。)

一方、オブジェクトを想像しやすく、そしてAとBが異なる場合にはどのような解釈が起こるのか。上述のように、「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>なるオブジェクトに出会った場合、それは常に $\neg$ 存在<sub>B</sub>なる性質を持っている」という情報がストックされるのであるから、情報としては無価値ではない(トートロジーではない)。(但し、領域Aが領域Bを包含している場合にはトートロジーである。)(1.1)のような状況であれば、例えば「うちの店Aにないものは、どこBを探しても無駄だよ。」と教えてくれる場合がこれにあたる。これはトートロジーではないから「開き直り」の態度とは言いづらいが、それに近いものも感じられる。つまり、自店への自信に裏打ちされているとは言え「誠意をもって探そうという姿勢は欠如」している態度である。一方で、その自信「うちの店には全てのモノがある」は素直に全能解釈であるとも言う。このような場合は、従って中間的なケースであると言ってもよからう。

このように、オブジェクトが想像しやすい、開き直り解釈あるいは中間的解釈では、聞き手の情報処理の動作としては

## (8.2) オブジェクトの導入による情景

場：発話の想定している場

総称O[Aに $\neg$ 存在]:例(問題のキャラクター商品など)  $\rightarrow$  Bに $\neg$ 存在

総称領域:発話の場にある全てのモノの集まり

という情景をストックすることになる。そしてAとBが同一である場合には、開き直り解釈となる。

この動作においては、「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>」なる性質は、問題のオブジェクトに付随的に見られる性質であることが多いと思われる。このオブジェクトを導入しやすくなるような、特定の例となるオブジェクトが既に導入されており、その性質の一つが「 $\neg$ 存在<sub>A</sub>」であるという文脈がそれである。

このように、聞き手の姿勢によって発話を理解するための情報処理の動作、とりわけオブジェクトの導入のしやすさに違いが生じ、それが解釈の違いを生む。それが聞き手のその後の行動に影響を与えるので、話し手としてはそれを見越して発話をするのである。

なお、オブジェクトの導入がしづらい例として本論文では主語の性質が「 $\neg$ 存在」であるものを取り上げているが、似たような状況は「存在」という性質以外にも考える。性質Pが、Pと $\neg$ Pとが二項対立しているようなものであれば、 $\neg$ Pなるモノを想像することはたやすいが、そうでない場合、 $\neg$ Pに属するモノはイメージの定まりにくい、オブジェクトとして導入しづらいものになる。(7.1.4)のように八百屋での会話であればともかく、非常に一般的な文脈で、「タマネギでないもの」を想像しようとしても、一体何をイメージすればよいのか戸惑うであろう。その際に「タマネギでないものは重要ではない。」と聞かされれば、領域計算に進み「重要なのはタマネギだけ」と解釈されるのは当然である。

## おわりに

本論文では、「聞き手が発話を聞くときに行われる処理を計算機が再現する」という目標の下で、人間の通常の意識下での処理の流れを内省によってたどってみた。情景とオブジェクト操作、そして領域計算という聞き手の処理を、特にモノの「存在」に関わるケースで考えてみると、処理の方法や程度が状況に応じて異なる(と考えられる)ために、「ないものはない」のような発話においては解釈の違いが生じるということを見た。特に存在の成否を問題にするような性質(語)がある際には、具体的なオブジェクトの導入ができるのか、それともすぐに領域計算に進んでしまうのかが、細かい状況によって異なり、「 $\neg$ Aなもの $\neg$ B」の発話をそのままオブジェクト操作で扱う「開き直り解釈」に進む場合と、「Bなものは全てA」という内容の領域計算によって扱う「全能解釈」に進む場合とが分かれることを見た。両者は聞き手がオブジェクトを想像しやすいかどうかによって扱いが分かれるのである。しかし、オブジェクト操作の理解も、より深く理解しようすれば領域計算に進むのであり、領域計算も具体的操作においては代表たるオブジェクトを用いることになるわけで、両者の間には常に揺らぎが見られる。ここにおいて「二つ



の解釈」としていたものは境界に揺らぎが見られると推測されるのであり、以下のような発話ではその揺らぎが見て取れるように思われる。

- (9) 状況：近く開催予定の特別セールにおいて、店主は考えられうる限りの多様な商品を用意して常連客に喜んでもらいたいと考えている。常連客の一人はかなり要求水準が高く、取り揃えていない希少品を欲しがることよくあって、店主としては断るたびに忍びない思いと、無理な要求への腹立たしい思いとが交錯してきた。しかし今回はその客の要求にも応えられるものとそれなりの自信を持っている。その客に、店主が誘いの言葉をかける。

店主：今度の特別セールも覗きに來てよ！ ないものはないからねっ！

この状況では、全能解釈「(聞き手の思いつくような) どんなものでも用意してある」という意味を伝達することによって、同時に「だから、聞き手からの不満が出るはずはないのだ」と暗に伝え、従って「もし不満を持つならそれは聞き手がおかしい」「聞き手が何かを要求するとしたらそれは元來が対応不可能な、トートロジーを覆すような要求なのだ」「だから、先に言っておくが、無いものねだりをされてもだめだぞ」という「開き直り解釈」をも先回りして伝えることにもなっている。

この状況において話し手の意図が二つの解釈のどちらだったのかを闡明にしようとしてもそれは無意味である。その区別はいまや聞き手がどのような姿勢でこれを捉えるかにかかっているであり、聞き手が好意的に状況を受け取るならば、話し手の発言（で伝えられた状況）に満足して感謝することになろうし、対立的に欲求をぶつける相手として話し手を捉えるならば、話し手の発言は極めて先鋭なものとして怒りを以て受け取られることになろう。前者であれば聞き手は特別な準備をせずに安心してこの催しに参加することになろうし、後者であれば聞き手は自らの不満・要求をどれだけ言っても無駄であることを認識し、要求を諦めるか、あるいは更に精緻化した要求の仕方を準備していくことになろう。そして話し手もそれを踏まえてこのような発話を行ったのである。

自然言語の働きを解明しようとする中で、計算機に「理解」させようとする方向、それは即ち我々自身が発話にどのように対処しているかを詳しく明らかにしようとするやり方であるが、それを実現するためには、本論文で取り上げたような様々な要素を扱えるだけの装置（仕組み）が必要となる。聞き手の「知識」の形式や、推論装置、そして「ないものはない」という単純な発話の扱いでさえ、聞き手や話し手の姿勢やオブジェクトの想像のしやすさなどを扱えるような装置が必要となるので、これらを含めた総体の詳細を定めるのはまだまだ遠い道のりであるが、今後の研究に期待したいところである。

参考文献

- Kamp, H & Reyle, U. 1993, *From Discourse to Logic*. Kluwer, Dordrecht.
- Stanford, *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, <https://plato.stanford.edu/entries/meinong/>
- 宝島格・今仁生美2002, 「計算機による言語理解のための方策」, 『名古屋学院大学研究年報』15
- 宝島格・今仁生美2003, 「計算機による言語理解のための方策2」, 『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』第39巻第2号
- 宝島格・今仁生美2007a, 「計算機における集合と個体の扱いについて」, 『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第18巻第2号
- 宝島格・今仁生美2007b, 「自然言語における個体存在の多様性」, 『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第19巻第1号
- 宝島格・今仁生美2009, 「図形的視点から見た「通す」「通る」の用法」, 『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第20巻第2号
- 宝島格・今仁生美2012, 「話者の想定から見た「中」と「間」の空間的および時間的用法」, 『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第23巻第2号
- 宝島格・今仁生美2013a, 「計算機による「中」の扱い」, 『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第24巻第2号
- 宝島格・今仁生美2013b, 「連続性に関する話者の想定と「通る」「渡る」「越える」の空間的・時間的用法」, 『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第25巻第1号
- 宝島格・今仁生美2016, 「発話理解における事態の構造化について」, 『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第27巻第2号
- 宝島格・今仁生美2017, 「自然言語における全体と部分の関係の認識について」, 『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第28巻第2号